乳幼児期の子どもを育てる保護者の教育観

子育てサークルにおけるグループインタビューによる検討

足立 法子
（奈良女子大学大学院人間文化研究科）

【目的】

乳幼児期の子どもを育てる母親や父親は，社会へ子どもたちを送り出す主体として，外界に対して何を感じどのようにとらえているのだろうか。時間経過のなかで行動＝思考＝感情システムの組織的変化がなされること（氏家，1996），また育児期女性の子育てについての意味づけ（徳田,2004）についても検討され，子育てを機会とした成人期における発達がとらえられている。子育ての孤立化が問題視されて久しいが，子育ては社会背景の変化や状況からの影響をうけ，さらに個々人の状況や背景からの影響も大きく，これが多様な子育てや親としてのありようのゆえんであるとも考えられる。氏家（2011）は親子システムの一般性と特殊性のひとつとして子育てにおける環境の性質が相互適応となる場合とそうでない場合があり，未検討の課題のひとつとして挙げている。ここでは，同様のグループに属する方を対象に，個々の背景は異なるだろうが，子育て支援や同じ場に居合わせて近しくなった保護者が，子育てをとり囲む周囲の環境や外界である社会をいかにとらえているか，子どもたちにどのような社会を提供したいと考え，そのための自らの役割をなんととらえているのかを「教育観」と捉え，探索的ではあるが，彼らの意識のありようを垣間見ることができればと実施するものである。

【方法】A 市において地域子育て支援拠点事業を実施する保育所に協力依頼し，参与観察とグループインタビューを実施する。対象は当該施設を利用している子どもが乳幼児期の親子である。

【結果と考察】

1）参与観察

保育所が実施する場において，父親や母親が子どもたちとともに参加する「園庭開放」などをともに過ごし，親子のかかわり，親子間のかかわり，子どもへの言葉かけや親同士のやりとりを観察対象とした。子どもや保護者が自由に遊びを選択できるようおもちゃを配置し，園庭も自由に利用することができる。日によっては子どもの年齢による対象者の限定を設けることもあるが，基本的には子どもがどの年齢の親子も自由に利用できることを周知している。紙面の都合上，親子の様子についてのおおまかな考察を行う。

子どもとともに過ごすために保護者は保育所を訪れる。一組の利用であり，担当者が不在の場合であっても，入所児や保育者が行き来する場所に遊び場が設置されており，孤立した感じは少ないらしく，「ここは居心地がよい」と話す母親もいる。多い時には 20 組ちかい親子が利用するため，にぎやかに感じることもあるが，園庭も自由に利用でき，子どもの様子に合わせて外で砂遊びや探索遊びなど自由に過ごしている。回数や期間を重ねると保護者同士はそれぞれに子どもの名前を覚えあい，挨拶を交わし情報交換をしている。ときに他の子どもと遊ぶことや，少しの時間を互いの子どもを見あう様子もある。また，他者の子どもへのかかわりを感じながらともに過ごし，子ども同士が挨拶をしようとする場面では，「ちょっとおそいんだよね」「あっ，はじめてタイミングよくいったねぇ」などと，子どもに話しかけることもしばしばあり，日常的に子ども同士のやりとりにも意識が向いていることがわかる。

2）グループインタビュー（調査期間 2012 年 10 月～12 月中旬）

同保育所の事業において仲よくなったサークルやグループにおいてインタビューを行う。５つのグループを対象に，自由な会であるため少人数のこともあるが，5 名から 10 名ほどの母親や父親を対象に，子どもとともにすごしながら，調査者がたずねる質問に自由に発言していただいた。

質問と発話内容として，支援事業やサークル参加することについてたずねると，「基本的におしゃべりしている。遊び場の提供はありがたい。本には書いていないみんなが実際にしていることが聞ける。みんなおなじことで悩んでいるとわかる。一緒に子育てをしている気がする。」との答えがある。社会問題を例にだし，子どもたちが大人になるころの社会に求めることをたずねると「だれかはいつもそばにいてくれると感じさせてあげたい。いじめの話を聞くと自分の身におこりそうで怖い。虐待のニュースを聞くとかなしくなる。」など，自身に直結させた発話が聞かれる。これらの発話をまとめ，子育て期にある方々がなにを子どもに与えたいと感じているかを検討し発表内容とする。

【参考】1）氏家達夫，1996，親になるプロセス,金子書房　2）氏家達夫，高濱裕子編著 2011，親子関係の生涯発達心理学,風間書房，3）徳田治子，2004，ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ，発達心理学研究 15(1),13-26